秋に一つ

わかしゃち群像

○…3…○

国体開幕 あと6日

柔道成年女子

土川美和子さん25

# 地元のため挑む減量

国体出場を決意したのは、育ててくれた恩師の熱意と、地元開催の重みを感じたからだった。そのためには、体重別56キロ級を52キロ級にしなければならない。年齢的には既に峠を超えていた。「最初で最後の国体」と決めて減量に挑んだ。昨年の夏のことだった。

名古屋市口金小の四年から柔道を始め、豊橋の桜丘高二年で全国高校選手権優勝、筑波大四年で全日本体重別選手権2位と、すべて56キロ級。団体戦となる国体は先鋒（ぼう）が52キロ級、中堅が66キロ級と続くため、昔から国体は考えていなかった。階級を52キロ級に変えれば、対戦相手の動きが早くなって得て、57キロの体重が51・5キロに減った。初めは力が入らなかった。若い大学生と同じ練習メニューもこなした。

出場を決意し、筑波大研究生だった昨年夏の約一カ月間、一日の食事はおにぎり一個と水分だけ。練習は柔道着の下にヤッケを着て、57キロの体重が51・5キロに減った。初めは力が入らなかった。若い大学生と同じ練習メニューもこなした。

一緒に技を一から覚える練習よりも自分流で一。思い切って研究生を辞め、この春、名古屋市内の両親の元に帰ってきた。

若い選手が台頭し、気を抜けば勝てなくなる二十五歳。国体に出場する全国の女子柔道選手の中でも、二番目の年長だ。

背負い投げの練習をする土川美和子さん―名古屋市港区の県武道館で

にくくなる理由もあった。

環境を変えたい。皆と一から柔道を取ったら、何もない。練習を二倍頑張ってくれた。

白分に甘えるな。私かそんな心情を知る高浜久和・国体強化委員長から指導を受けながら、高校へ出げいこ、自宅近くの山を走る日々を続けた。

同市内の母方の祖父、後藤長光さんでも、が、高校で優勝した試合以来、会場へ訪れてくれることも励みになった。

「優勝の喜びをもう一度。石にかじりついてでも勝つ」。

シンの強そうな顔が、引き締まる。減量、帰郷と柔道生活を一変させたこの一年。国体への思いは、人一倍強い。